

2019年8月8日に長崎で開かれた第42回自治体労働者平和のつどいにおける特別報告を掲載します。

四国の「反核ライダー」と「反核へんろ」のとりくみ

自治労連四国ブロック協議会青年部

1987年～反核ライダー四国コース

1987年、夏。原水爆禁止世界大会にむけて大阪の青年が「好きなバイクに乗って、俺たちにできる行動を…」とはじまった反核ライダーは、四国の愛媛の青年に、そして高知へ、徳島、香川へと四国4県で取り組まれるようになり、大きな「平和の風」となっていました。

反核ライダーの目的

核兵器の即時廃絶と戦争のない平和な日本と世界の実現をめざすことを目的として生まれました。具体的な活動として、

- ① 反核ライダーとしてオートバイで走ることによって、世論へのアピールを行います。
- ② 各主要都市での「ヒロシマ・ナガサキからのアピール署名」行動をすすめます。
- ③ 「非核自治体宣言」を行っていない自治体に要請行動を行います。
- ④ ライダー終結地点で平和集会・学習会等を開催し、地域の青年と平和の思いを交流し、共同の取り組みをすすめます。

反核ライダー誕生秘話

毎年、広島・長崎で行われる原水爆禁止世

界大会には、世界中から多くの人々が集まります。「二度と同じ過ちを繰り返してはならない」という共通の願いを胸に、日頃の平和活動の成果を持ち寄って「核兵器のない平和な地球」を一刻も早く実現しようと集まってきます。

団体で、バスで、船で、海外から飛行機で、マラソンリレーで、車椅子で…。平和を訴えながら人それぞれの方法で、共通の願いのためにやってきます。

そんなとき大阪の青年—バイクを愛する青年たちが「バイクに乗れるのも平和な世の中でのこと。一発でも核兵器が爆発すれば何もかも無くなってしまう」「バイク好きの俺たちも平和を訴えながら走ろうじゃないか」。1987年にこうしてはじまった反核ライダーは、全国の青年の心を揺さぶりました。バイクによるリレー方式で全国各地を縦断し、沿道で、自治体で、各県庁所在地で、休息地点で、立ち寄った労働組合や民主団体の青年とともに「アピール行動」を繰り広げながら、原水爆禁止世界大会会場（広島・長崎）まで核兵器廃絶を訴えていきました。

青年独自の表現で国民に平和を訴える大きな運動に発展しました。このとりくみに参加

した労働組合の現在の役員もかなりいて、それぞれでつながりがあります。



2004年8月愛媛県を出発する反核ライダー

四国での取り組み(～反核ライダーT(徳島)さんの報告から)

はじめの年に全国の取り組みに参加したのは、四国では愛媛県のみでした(1988年)。

「平和のことを考えることはあっても、実際に行動したことはあったらどうか?」ととにかく感動。みんなにこの思いを広げたい」…こうした呼びかけに、2年目(1989年)には高知県市町村職労(現在は高知自治労連)青年部と共同で取り組むことになり、はじめて四国ブロック実行委員会を結成。それまでほとんど交流のなかった愛媛と高知の青年が、この取り組みを通じて平和の架け橋で結ばれました。

そして次の年(1990年)、徳島県の鳴門市役所現業労組(現在は鳴門市従)青年部に参加を要請。3県が四国を周回するコースを完成させました。また、この年から自治体に働く青年だけでなく医療・県関係や民主団体、近畿地区からの参加者もあり、産別や地域をこえた取り組みへと広がりました。

1991年、ライダーとして参加できない多くの青年、学生や地域住民の人たちも一緒になって平和について語り合おうという目的で、最終合流地での「ピースフェスタ」が開催さ

れました。

第1回は高知県高知市・城西公園野外劇場で、第2回(1992年)愛媛県松山市・番町公民館、第3回(1993年)徳島県徳島市・藍場浜公園、以後それぞれ各県で開催されるようになりました。

ライダーからの報告のほか、被爆者の会より被爆体験を聞いたり、世界大会参加者からの報告やコンサート・クイズ等、各県労連青年部で実行委員会が組織され、それぞれ趣向をこらした内容となり、ますます広範な取り組みとなっていきました。

1992年から四国では、全国に先がけて全労連青年部の取り組みへと発展しました。また、香川県からの参加で四国4県がそろったこともあり、南北・東西2コースに分かれてのコース設定が組まれるようになりました。

1994年より本コース(北海道～広島・長崎までの本州コース)への合流、受け入れ体制も視野にいった日程・コース調整が行われるようになり、近畿・中国ブロックのライダーとの交流も深まっていきました(近畿ブロックより16人の参加があったのをはじめとして、毎年他のブロックより参加があり、2000年前後にピークをむかえ、多いときは40～50台のバイクで走行する区間がありました)。

何よりの成果は、反核ライダーが四国4県で取り組まれるようになって、それまで交流のなかった四国の青年が反核・平和の活動をきっかけに知りあい、交流を深める中で、1992年四国ブロック青年部結成にも至りました。ちなみに青年部結成大会当時の青年部役員は、青年部卒業後も各県・単組役員として奮闘しており、現在も交流は続いています。



平和のアピールをする参加者
—2日、高松市

反核ライダー
讃岐路かける
高松
金労連四国青年部を中

心とした取り組み「反核ライダー」が讃岐路を駆け抜けました。
二日、高松市役所で連帯集会が開かれ、平和を願うメッセージが掲げられました。
「守り発展させよう憲法九条」実現します核廃絶のゼッケンをつけた「反核ライダー」を代表して愛媛県の曾根岡伸也さん(同)は、「昨日、愛媛の内子町を出發し、松山や新居浜を経由して走ってきました。反核平和をアピールして走る四国青年部の取り組みは盛り上がりを感じます。各地域で反核の取り組みが行われることを期待したい」と話しました。
香川県労連の篠田マサ子議長は、「自民党の憲法九条改悪による他国への攻撃などにかかわることや、被害を受けることのないよう、各一〇の要請書を提出しました。同日夕方には徳島市に到着、街頭から反核への思いや憲法を守れと訴えました。」

2005年反核ライダー、香川県高松市役所での集会を伝える新聞記事

反核・平和活動は青年部の重要な取り組みの一つとして現在も進められています。「反核ライダー」はとりわけ四国においては青年部結成のきっかけにもなった貴重な取り組みとして、次代を担う青年部の力で「反核ライダー四国コース」の存続・発展をとり組んできました。

反核ライダー四国コースでの取り組み

平日5日間を使って、文字通りバイクと伴走車(車)で四国を一周しながら、各単組・市町村を訪問し、反核平和を訴えとりくみとして行いました。各自治体へ「平和行政の推進」に関わる要請として、非核自治体宣言にもとづく平和行政、憲法遵守と憲法改悪反対、核兵器廃絶への自治体としてのとりくみ、「核兵器全面禁止のアピール署名」への協力

などを求め、また東日本大震災以降は「原子力政策に関わる安全対策等を求める」要請も行ってきました。

また、繁華街、駅頭にて署名宣伝活動を実施するなど、四国各地でアピール走行を行って来ました。反核平和を伝える、訴えるグッズとして、Tシャツ、タオル、ポケットティッシュ、携帯クリーナー、飴、署名用ボールペンなどの作成、ライダーが走りながらアピールするために「欲しがりません核だけは」「今すぐ平和を明日に希望を」と書かれたゼッケンの装着などを行いました。

単組や組合員のみなさんには、リッターカンパ(ガソリン1リットルを基礎額にしたカンパ)などもお願いし、「バイクで走れなくても気持ちは一緒」と、快く協力いただきました。

2012年には伊方原発の見学を申し入れたところ、「原発に反対する団体は受け入れられない」と四国電力から通知され、抗議しました。

反核ライダーの存続発展のために

2000年前後をピークに毎年ライダーの参加者は減少し、一部区間においてはライダー(バイクによる参加者)が0~1人という走行区間も増えてきました。全国的な組合加入率の低下、青年のオートバイ離れ(バイクが趣味や嗜好品になってきた)、また自治体職員においては市町村合併や退職者不補充による労働過重等で年休も消化できない実態がライダー激減の理由として考えられました(参加者の平均年齢は上がり続ける…)。

「反核ライダー」の存続、また発展させるために、各県・単組ごとにオートバイ・二輪免許の所有数を把握して、青年に限らず対象者

には呼びかけを徹底する、より多くのライダーに参加してもらうためにも、日程・コース設定を考えていくことなどが課題にあげられるようになりました。

「反核ライダー」の参加条件がどうしても、普通二輪免許とオートバイ（基本的には126CC以上）を所有していることが条件となっているため、参加したくてもできない場合に、オートバイにこだわらず、「反核サイクリング」「反核マラソン」等に替えていくことも反核・平和の取り組みに変わりはないので柔軟に対応してはどうか？という意見も出されていました。

四国ブロックでの『反核平和のとりくみ継続』のため、「反核へんろ」へ

2013年、実施の中心である自治労連四国ブロック青年部として議論を重ね、四国ブロックのキーワード「四国は一つ」のとりくみ、「核兵器廃絶を訴え、四国一周する反核ライダーは続けていきたい」し、反核平和を主題にとりくみ、PRはし続けたいという意見で一致。そこで四国らしさを活かす「遍路」はどうかとの意見が出され、皆が同意しました。原水禁世界大会にあわせて、週代わりでどこでも参加できる形にし、リレーのバトンは「届ける」（例：愛媛県から香川県の反核へんろに参加し渡す）方式に。おへんろ衣装を各県2セット揃え、最初は2013年7月6日に徳島で東林院（『原爆の火』がある）から1～4番、13日高知24～25番、15日愛媛50～51番と55～56番、8月3日香川87～88番札所を訪れました。

徳島県で80歳の女性から88番札所に納めて欲しいと託された折り鶴と一緒に、へんろ装束に身を包んだ青年を先頭に、反核ライダ

ーゼッケン（当時）をつけて、道行く人々にアピールしました。また、各地で、札所のお寺、道の駅、街頭で「核兵器全面禁止のアピール」署名を集める宣伝行動などに取り組み、署名を世界大会に持っていくことにしました。

※お遍路（へんろ）とは、「祈願のため、弘法大師（空海）修行の遺跡、四国八十八か所の霊場をめぐる歩くこと。またはその人」。四国八十八箇所は、四国にある空海ゆかりの88か所の寺院の総称で、四国霊場の最も代表的な札所である。他の呼び方として「八十八箇所」「お四国さん」「本四国」などがある。四国八十八箇所を巡拝することを四国遍路（へんろ）といい、また四国八十八ヶ所霊場会では「四国巡礼」といい、他に「四国巡拝」などもいう。

反核へんろ開始からその後

最初の7月の実施に際し、猛暑で熱中症対策など参加者へのケアが盲点になっていたことが挙げられ、時期を変更することに（現在は2～3月、お遍路も春・秋が多いそう）。

汗をかくのでオリジナルタオルを作成、へんろ衣装を全員分は難しいので、2017年にライダー時代のゼッケンに代わる「反核へんろオリジナルビブス」『核兵器のない平和な世界を』のメッセージと『伊予かん路くん』のイラストが描かれたものを作成。単組・組合員には、リッターカンパ（飲み物500mlを基礎額にしたカンパ）や署名、折り鶴などの協力を呼びかけ、多くの方に協力いただいています。

「核兵器の廃絶」を目指す「草の根からの行動」の一つとして引き続き取り組んでいます。また四国の青年やへんろでの交流をはかっています。